

世話人交代

報恩講の運営を全世話人と当番地区、①二部上・中②二部下・検儀谷③上記以外の富山④鋸南の各地区ご門徒、で担っていただいております。

四年に一度の当番地区の報恩講が終わり、新世話人に交代する地区もあります。今回は、鋸南地区の次の方々が該当します。

市井原 川名 一夫様
大崩 高梨 教夫様
大橋 田村 本様
有り難うございました。
市井原 川名 昇 様
大崩 石井 俊幸様
大橋 中山 明夫様

なお、この方々以外の世話人は、昨年11月寺報115号記載の通りです。

世話人の方々には、各地区のご門徒と寺とのパイプ役や奉仕作業などもしていただいております。また前住職前坊守の葬儀には、大変お世話になりました。今後、八日講十日講や中佐久間講のような、正信偈のお勤めをし法話を聞き語り合う会を各地区で行いたい考えです。ご理解とご協力を願います。

推進員教習

三月十一日から東京練馬の真宗会館で二泊三日、五月十八日から今度は京都東本願寺で二泊三日の教習を受け、新たに三人が推進員となります。推進員は、率先して聞法求道する人のことです。

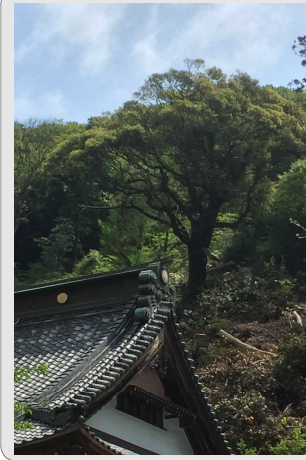


黒川敦子
正木道雄
渡邊秀子
(敬称略)

聞法する仲間が増えること。それが寺の繁盛です。希望者はお申し出ください。

本堂裏山の樹木伐採

難しい仕事を吉沢の川名陽一郎氏が引き受けてくれました。雑木を伐採したら椎の太木が現れました。聖人橋脇の玉楠(タブの木)同様、寺の歴史を感じます。



合同研修会(五月二十日・二十一日)

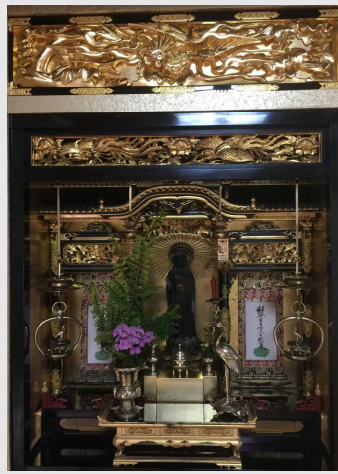
これは、県内の真宗大谷派の僧侶と門徒を対象とする千葉組主催の研修会です。

足達 崇 大胡登美子 川名喜昭
鈴木正一郎 関口昌司 田村晋一各位に参加していただきます。もちろん住職も同行します。

同朋大学の市野智行先生に浄土真宗の要である聞法と信心をテーマにお話いただき、各自が聞き取ったことを語り合います。

仏法の場です。当たり障りのある意見交換を期待しています。

お内仏の移徙(わたまし)



旧居間から庫裏十畳の間に移動し、ここで少人数の聞法会も出来るようになりました。

最上部の欄間は、修理に出し見違えるようです。

「予定ください！」

6月2日9時	八日講十日講
6月2日14時	勝善寺聞法会
6月5日13時	教区同朋大会
6月12日13時	親鸞教室
6月14日13時半	組婦人研修会
6月18日13時	組同朋総会
6月23日8時半	奉仕作業
7月28日14時	同朋の会
8月10日10時	孟蘭盆会
9月23日10時	秋彼岸会
10月2日13時	親鸞教室
10月10日13時半	役員会
10月13日14時	同朋の会
10月20日13時半	世話人総会
11月13日13時半	仏具お磨き
11月15日	報恩講(準備 速夜)
16日	報恩講(晨朝 日中)
12月6日13時	親鸞教室
12月8日14時	勝善寺聞法会
12月未定	婦人研修会
12月31日23時45分	除夜の鐘

※：以外は当寺が会場です。

光といのち

第118号
2019年5月15日発行

発行所
真宗大谷派勝善寺
〒299-2214
千葉県南房総市二部1344
電話 0470-57-2657
FAX 0470-57-2290
Eメールino-teyy@khaki.plala.or.jp
URLhttp://syozenji.or.jp/
住職 釋孝昌(井上孝昌)

法事を勤める心

平成から令和に元号が改まり、十連休も終わり、日常が戻ってまいりました。

さて、母の命日が近づいてきた所為か、松原祐善師の次の文章が目が止まりました。

母への祈念

五月三日といえど戦後は憲法記念日として国民の大切な祝日となってきたいるが、実はこの日は私は忘れることの出来ない母の命日なのであります。年を重ねるに従い亡母へ



川名喜昭さんは、丹精して育た洋ランの蕾が膨らむと、毎年、玄関を飾ってくださいます。

むざんむき
無慚無愧のこの身にて

まことのこころはなけれども
みだ えこう みな
弥陀の回向の御名なれば
じつぽう
功德は十方にみられたまう

「正像末和讃」より

の思慕というのか、この頃は母に対する祈念が切実になって来ました。私の母は四十才でこの世を去ったのでありますが、もし母が現在もこの世に生を得て居られるとすれば、もう古稀も過ぎて腰も曲った白髪の老婆になつて居られることに相違ないが、しかしそういう老婆の姿で私は自分の母を想像することがどうしても出来ないであります。いつも自分に生きて懐しく思い出されてくる母は三十代の若い姿の母であり、そして何年たっても少しも年をとられることがないのであります。そのことは母が四十才の若きでこの世の姿を消してもうその上はこの地上で年をとられるということがないことになったからでありましょう。しかしその姿は見えないが、母は永遠に私自身に生きて現在しているのであります。私はこの母の手に支えられて今日まで幾度か出逢ってきた生活のいきづまりや生命の危機にも自暴自

棄になることから免れて、己を捨てて何よりも現実の事実を受けとることを学ばしめられて来ました。私の父は晩年には円満ぶりを見せていたようではありますが、性来融通のきかない、その点は私も父の性格をそのまま受け来ているが、頑固な一徹ものでありました。貧しい寺の坊主としてこの父に嫁して来た母の生涯はなかなか苦労が多かったのです。恐らく私の母はこの人生に希望などということはかけらも持ち合せがなかったであろうかと思われれます。全く忍従の二字がその歩みでありました。しかしその忍従に後悔の跡を少しも残しませんでした。母は母なりにこの世にこの世以上の人生の意義を見出していました。無常を無常と知ってこの世に求むることをせず、しかもこの世を愛して命限りにこの世の現実仕え挺身していったのであります。

母の死は私が田舎の郷里の中学を卒業してまたま京都に出ました当初、一カ月後のことでありました。当時既に母は病床にあったのでありますが、のん気ものの私にはそれがそんなに重病であったとはつゆ知らなかったのであります。臨終の床に父は母に対して遺言はないかとたずねました。なんにもないというのが母の答えでした。次に父は京都に出た長男を呼びたいと言葉をかけて

みたのですが、一カ月前、彼の出発のとき私はこの世の別れを済ませました。仏法の一大事の勉強に出かけたのですから。会いたくありませんというのが、父から聞かされた母の最後の言葉でありました。幾とせを重ねてもこの母の言葉の前に頭の上げようのないのが私の今日の姿でございます。今にして一大事が一大事として起たないのであります。まことに慚愧の至りです。幸いに今年の母の法要にはめずらしく金沢の工師をお招きすることが出来て、法話をいただくことが出来たのは何よりの喜びでありました。

『松原祐善講義集』第四巻「真人によせて」より

ざんぎ
慚愧の念すら無い自分に思いが至るばかりであります。

※題字下「無慚愧無」は、慚愧が無い、罪を恥じることを知らないこと。

第2回 勝善寺聞法会

6月2日(日)14時～16時

講師 副住職 井上泰之

テキスト『歎異抄白口抄』

参加費 500円

仏法を聴聞されたい方、住職坊守といっしょに聞法しましょう。余所では味わえない喜びがあります。

第二回勝善寺聞法会にあたって

副住職 井上泰之

来る六月二日（日）に第二回勝善寺聞法会を開催する。

当聞法会は、『歎異抄』をテキストに自己の迷妄から解放される道を聴聞するものである。それについては、折に触れて、様々にご案内させていただいた。

聴聞といっても、それは何なのか。聴聞が不明なものが聴聞について、自己の解放について訴えるのは、結局迷妄の一途を辿るにほかならない。その迷妄の先頭にいるのが私であることを認められてもおかしくない。第一回聞法会では、私の思索が纏まらないままにお話したため、聴衆の方を随分と困らせたのではないかと思う。そして、それをまた繰り返そうとしている。中

苦しんでも 苦しまなくても
どっちでもいい。



第1回勝善寺聞法会風景です。
2月10日（日）

途半端に学問に触れ、中途半端に仏道を歩まんとしたためか、そのしわ寄せが、私の話は「よくわからん」というかたちで表出してしまっている。

しかし、今ここに、その迷妄存在である私そのままに、日ごろ感じていることをお話しさせていただく機会が与えられたのである。迷いに迷い、今もなお迷って止まない自分をして、求めざるをえないものがある。この「私一人」が何なのかをハッキリさせなければならぬ。

記憶にも新しいが、今年の三月に愛媛県西条市のある中学校で、十四歳の男子中学生が集会中に同級生の男子生徒の頭をナイフで刺して殺害しようとする事件が起こった。また一月には、野田市で小学四年生の女子児童が親の虐待の末に命を落とした事件があった。到底、理解できないような事件が、今も昔も変わらずにある。

先の女子児童虐待事件で、マスコミや評論家、一般市民は、両親への非難だけではなく、こぞって女子児童の悲痛なSOSを受け取れなかった学校や教育委員会を批判し、反省と組織対応の改善を求めた。それについて私は賛成であり、二度とこのような悲惨な事件が起きないように改善に改善をしていかなければならないと思う。ところが、とある番組を見ていた時、その番組に出演した前宮崎県知事の東国原氏の発言に引っかけたことがある。その時、東国原氏は

「道徳や倫理を大道德・大倫理にまで高めなければならぬ」というような趣旨の発言をしていた。その発言を聞いた時、私の思いは一変したのである。それは「ずいぶんと人間は他人事なのだ。空しいものだ」ということである。よくよくこのニュースを見ていれば、それに尽きるように思う。マスコミも評論家も、インタビュに答えているものも、みな空しい者としてしか見えなかった。

なぜ、あの事件に対して「私もその一端を担ぐものかもしれない」という危機感が起こらないのか。「ひどい」「かわいそう」という社会の声に迎合し、そこに「私」がいることを忘れてるように思えて仕方なかったのである。そのような人生は空しいものではないのか。そこに本当に満足のまに生きることは実現するのか。私のどん底に落ちて、はじめて私そのままに躍り出れる世界が開けてくるのではないのか。そのようなことを思うのである。

第二回聞法会の開催にあたって、私は自己の迷妄から解放される道、空しさを超える道を日々の生活と思索を通して『歎異抄』に尋ねていけたらと思う。特に『歎異抄』の序にある「自見の覚悟」や第一章の「罪惡深重煩惱熾の凡夫」という言葉によりながら、お話させていただければと思う。

序

原文

竊かに愚案をめぐらして、^{ひそ} ^{ぐあん} ^{ここん} ^{かん} ほぼ古今を勘がうるに、先師の口伝の真信に異なることを歎き、^{くでん} ^{しんしん} ^{なげ} ^{こうがくそうぞく} 後学相統の疑惑あることを思うに、幸いに有縁の知識に依らずは、いかでか易行^{うえん} ^よ ^{いぎよう}

の^{いちもん} ^い 一門に入ることを得んや。まったく自見の覚悟をもって、^{たりき} ^{おんもの} ^{がたり} 他力の宗旨を乱ることなかれ。よって、故親鸞聖人の御物語のおもむき、^{おんもの} ^{がたり} ^{とど} 耳の底に留まるところ、いささかこれをしるす。^{うんぬん} ^{どうしんぎようじや} ^{ふしん} ^{さん} ひとえに同心行者の不審を散ぜんがためなりと、云々

現代語訳

私が思うに、親鸞聖人がいらつしやったところといまとをくらべてみると、聖人が直接教えてくださった信心と異なることがあるのは、まことに悲しいことである。

それによつて、教えを学び受け継ぐ者たちに、疑いや惑いが起こりつつある。よき師に出遇うことがなければ、本願念仏の教えには入ることができないであろう。自分の勝手な考えで、他力の教えを決して乱してはならない。そこで、亡き聖人からお聞きして忘れられないお話の要点を書き記しておこう。

これはひとえに同じ志の求道者が陥りやすい不明な点を除くためである。

『歎異抄』に現れる親鸞の思想は、現代の我々の思考にも深く食い込むところがある。固定的な価値意識や善惡の基準が崩れていく当時の状況は、現代日本の現状にも似ているのではない。不安定な事態を生きなればならない人間にとって、本当に安らぐことのできる信念がありうるのか。『歎異抄』はそれを示している。

（『現代語 いま親鸞に聞く 歎異抄』親鸞仏教センター「はじめに」より）

（『現代語 いま親鸞に聞く 歎異抄』親鸞仏教センターより）